

令和7(2025)年度 四日市大学 研究テーマ一覧

<原文ママ>

(学部別・五十音順・敬称略)

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	1	浅井 雅	地域社会における「学問」受容 —18世紀武家社会を中心として—	日本において近世は、あらゆる階層が初めて「教育」を受けた時代、教育対象が一気に広がった時代である。その時代に外来思想としての儒教が、儒学または漢学として広く教育に取り入れられていった。 ただ、近世日本の儒学は、軍事の論理によって編成された武家社会では、少なくともその成立当初（17 世紀前半）には、多くの藩において学ぶ必要のないものと捉えられていた。このような状況の中で儒学は、支配層である武家社会には各藩に浸透しているとは言い難く、むしろ上層庶民によって自発的に学ばれていた。しかしながら、18 世紀に入る頃になると、武士が、戦時の戦闘者という本来の性格に加えて、平時の官僚という性格をも併せ持つようになり、儒者の登用や儒学による家臣団教化が行われ、儒学を取り巻く状況が大きく変化する。その代表的な例が武家社会における藩校の設立であり、この藩校は現代の中等・高等教育（高等学校や大学）につながっているものが数多く存在する。したがって、藩校は現代の教育の根本の一つと考えることができる。 また、グローバル化の中にある現代日本においても、様々な外来思想が流入している。このような時代に生きる私たちにとって、元々近世日本の人々にとって外来思想であった儒学が日本の中で定着していき、「学問」化していく、その浸透過程を検討することは、外来思想の浸透過程の一つのパターンを解明できるという意味で有意義なことだと考えられる。よって、外来思想である儒学の最初のインパクトがどのように日本社会に浸透し、「学問」化したか、さらにその様相に地域差は無かったかを検討する。 さらには、このように諸藩が儒学・儒者を受容することにより、当該諸地域にいかに「学問」、そして都市の文化が流入したか、そのことによって当該諸地域にどのような思想的変化がもたらされたかも合わせて考察を行いたい。 また、現在では、近世だけでなく、近代にも研究対象時期を広げており、近世・近代における知識人の社会的役割の総体を明らかにするという、よりスケールの大きい研究への発展を目指す。
総合	2	岡 良浩	外国人雇用の実態に関する調査	名張商工会議所と連携して昨年度に実施したアンケート調査をもとに、企業にヒアリング調査を実施することにより、県内企業の外国人雇用についての考え方を事例研究する。
総合	3	加納 光	中国初代総理—周恩来—その人格と思想の形成過程について ～日本留学中の足跡を追って～	周恩来（1898年3月5日～1976年1月8日、中華人民共和国の革命家・政治家）は、中華人民共和国成立後、国務院総理（首相）を終生務めた人物である。江蘇省淮安の名家に生まれ、叔父の養子となる。後に天津に転居し南開中学で学ぶ。その後、1917年から日本へ留学。およそ2年間、東京・神田の東亜高等予備学校（日本語学校）や明治大学政治経済科（旧政治学部、現政治経済学部）に通学し、1919年に帰国すると、天津南開大学の学生となり、五・四運動に参加。1920年、勤工儉学運動でフランスへ留学、1921年中国共産主義青年団の創立に加わり、翌1922年中国共産党に入党する。後、黄埔軍官学校政治部主任、党中央軍事部長、第一方面軍政治委員を務め、軍事面での指導者となる。周恩来は1972年日中国交正常化の際、田中角栄首相（当時）と固い握手をしたことでも知られ、日本でも人気の高い政治家である。しかしながら、周恩来の日本留学中の足跡については不明な点が多い。本研究は、周恩来の日本留学中の足跡を辿りながら、その人物像を明らかにすることを目的とするものである。
総合	4	川崎 綾子	中小企業による顧客価値の創出戦略	本研究の目的は、中小企業が現代を生き抜くための戦略について、顧客価値の観点から考察することである。感染不安の現代を生き抜くための方法の1つとして、高付加価値の製品の創出が考えられる。大企業のような大量生産・大量販売が難しい中小企業の場合、製品単価や客単価を高める戦略が1つの方法として挙げられる。そうした顧客価値の創出について論じる際には、形のあるモノだけでなく、サービスの側面も考察する必要がある。多くの「モノ」はサービスを伴うと同時に、多くの「サービス」はモノを伴うと考えられるためである。例としてテレビ番組の放送というサービスなしに、テレビを使うことは困難である（Russell & Taylor, 2010）。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	5	倉田 英司	歴史的まちなみの整備における文化財保存と生活環境の両立に関する研究	現在では、全国各地で地域の歴史や文化を活かしたまちづくりが行われており、歴史的まちなみの整備もその一つである。 歴史的まちなみの整備対象は、建造物を保存するだけでなく、建造物の外観また利用方法、住民らの意識や居住環境など多岐にわたる。したがって、地区内の実情に応じた整備が求められる。 特に、文化財的な目線からの整備内容の検討だけでなく、生活環境等の人々の暮らしとの関係性など、地区ごとに異なる課題について、総合的に判断した上で整備目標を設定することが必要である。各地区の整備目標は、今後も多様化していくものと考えられ、現場での整備内容もさらなる複雑化が予想される。 本研究では、全国の歴史的まちなみ整備の運用事例に関する分析から、文化財保存と生活環境の両立に向けたしくみづくりの検討を行う。
総合	6	小泉 大亮	高齢者を対象とした地域型運動グループの継続やリーダー育成に関する研究	高齢期においても健康維持・増進のために身体運動の実践が推奨されている。健康維持・増進を目的とした身体運動は、長期にわたり継続的に実践することや仲間と一緒に実践することが鍵となっている。これまでに様々な地域において地域型運動の介入指導や研究を実施し、それらの地域型運動グループが長年にわたり継続している。そこで、それらの地域型運動グループを対象にグループの取りまとめをしているリーダーや運動指導に携わっている指導者にアンケートや聞き取りによる調査を実施し、高齢期の地域型運動推進に向けたグループの継続方法やリーダーの育成方法について研究する。
総合	7	小西 琴絵	大学生の就職活動行動に対する時間的展望の多次元的影響：未来・現在・過去志向に基づく探索的検討	【研究目的】 本研究の目的は、大学生の時間的展望（Time Perspective）が就職活動における行動および行動の質的側面にどのように影響するかを、多次元的に明らかにすることである。従来の研究では、未来志向といった特定の次元に着目した実証的検討が行われてきたが、今年度の研究では、時間的展望の全次元（未来志向、現在快楽志向、現在運命志向、過去肯定志向、過去否定志向）を包括的に扱い、大学生の就職活動行動をより精緻に捉えることを目的とする。 【研究背景】 大学生のキャリア形成支援の重要性が高まる中、学生の意思決定や行動選択に影響を与える心理的要因の理解が求められている。なかでも「時間的展望（Time Perspective）」は、自己と世界を過去・現在・未来の枠組みで捉える認知的・感情的・動機的特性として注目されてきた。Lewin（1951）は、時間的展望を「ある時点における心理的過去および心理的未来に関する見解の総体」と定義し、人間の行動は現在という瞬間において、過去の経験や未来の予測と結びついていると理論化した。このように、時間的展望は自己調整や動機づけの基本的枠組みとして重要な役割を果たすとされる。 この時間的展望を多次元的に捉えるために、Zimbardo & Boyd（1999）は「Zimbardo Time Perspective Inventory（ZTPI）」を開発した。ZTPIは、個人の時間的志向性を理論的に測定する指標として国際的に広く用いられており、未来志向（Future）、現在快楽志向（Present-Hedonistic）、現在運命志向（Present-Fatalistic）、過去肯定志向（Past-Positive）、過去否定志向（Past-Negative）の5次元で構成されている。各次元は、行動傾向、精神的健康、自己効力感、衝動性、対人適応といった多様な心理・社会的要因と関連し、キャリア選択や意思決定との関係でもその有用性が示されてきた。 既存研究では、未来志向がキャリア計画性や職業的自己効力感と関連し、また過去否定志向が就職活動行動の活性化に寄与する可能性が示唆されている。一方で、現在快楽志向や現在運命志向、過去肯定志向といった他の時間的傾向が、どのように就職活動に影響するかについては、理論的・実証的検討が依然として限定的である。 そこで本研究では、時間的展望の多次元性を前提に、就職活動における行動の量的側面（行動頻度や参加経験）と質的側面（選択基準、納得感、ストレス認知など）の両面に着目し、大学生のキャリア行動における時間認識の役割を理論的・実践的に再検討することを目的とする。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	8	小林 慶太郎	地方自治体におけるセクシュアルマイノリティ政策の導入と展開	日本では、近年、LGBTとしばしば総称されるセクシュアルマイノリティへの対応が政策課題として認識されつつある。 本学が立地する三重県においても、2021年3月に「性の多様性を認め合い、誰もが安心して暮らせる三重県づくり条例」が制定され、また、四日市市においても、性の多様性に関する基礎知識等を紹介した啓発パンフレット「性の多様性レインボーブック」が作成されるなどしている。 しかしながら独自の取組みを始めた自治体はまだ少数にとどまり、多くの自治体では、手探りの状態であったり、あるいはまったく検討もしていない状態であったりしている。また、トランスジェンダーの権利を認めると女性の安全が脅かされるようになる等のバックラッシュともいえる言説が出回るなど、施策の推進に反対する動きも見られるようになってきた。 そこで、一部の自治体で既に始められている施策の内容や導入過程を明らかにし、今後の全国各地の自治体へのその展開を展望したいと考えている。
総合	9	小林 慶太郎	基礎的自治体におけるミニ・パブリックス導入の課題と可能性	近年、無作為抽出した市民による「ミニ・パブリックス」といわれる手法によって、民意を捉えていこうとする取り組みが、散見される。無作為抽出で参加者が決められることから、代表制民主主義に対して「くじ引き民主主義」などとも呼ばれ、こうした動きは注目されつつある。 しかしながら、こうした取り組みには多くのコストが掛かることもあり、ルーティン化されることはなく単発の社会実験的な取り組みで終わってしまうことが多く、そこで把握された民意が政策にダイレクトに反映されることも少ない。 一方で、愛知県岩倉市のように、ミニ・パブリックスを条例で位置づけ公的な取り組みとして導入していく基礎的自治体も現われ始めた。 そこで、こうした条例によるミニ・パブリックスの導入や、その政策への影響、運営上の課題などを整理し、今後の普及・定着の可能性を展望したいと考えている。
総合	10	小林 慶太郎	食による地域振興の可能性と課題	近年、食関連産業による地域振興が注目を浴びている。たとえば三重県では、食関連産業を「本県にとって今後の成長が期待できる分野」と位置づけ、2015年に『みえ食の産業振興ビジョン』を策定し、支援施策を集中的に展開している。 また同県のインターネットサイトによれば、2021年の「観光実態調査」では、「自然や風景を見てまわる」36.9%、「おいしいものを食べる」31.9%が三重県を訪れる上位の目的となっており、三重県の「食」は観光資源として魅力度が高い状態にあるという。さらに食は、食文化という観点からも着目され、地域アイデンティティとも結びつきやすい。 2023年、四日市市において開催されたご当地グルメによるまちおこしの祭典「東海・北陸B-1グランプリin四日市」も、こうした食による地域振興の取組みと言える。 そこで、このように様々な観点から注目される食による地域振興を取り上げ、その可能性と成果及び課題を整理し、その政策としての今後の展開の可能性を検討したい。
総合	11	高田 晴美	大正時代の〈貞操論争〉と女性文学者たちによる言説	大正時代に生田花世の「食べることと貞操と」を発端に始まり、『青踏』周辺の女性たちを中心に繰り広げられたいわゆる〈貞操論争〉を振り返り、その当時、そして現代まで、女性たちが女性の貞操（特に処女性の意味での）と女性の身体の主体性をどのように語ったのか、表現したのかを、論争の言説にとどまらず、少女の貞操がテーマとなった文学作品なども視野に入れて分析する。成果の一部は今年度9月の四日市市人権センター主催の人権大学あすてつぷ講座にて発表する予定である。
総合	12	鶴田 利恵	自由貿易体制の新たな展開	米トランプ政権による関税率引き上げにより、第二次世界大戦後築かれてきた自由貿易体制が大きく揺らぐとしている中で、国際経済秩序を維持していくための日・欧・アジアによる自由貿易協定や地域連携協定の重要性が増している。この地政学上の変化を含む新たな国際経済秩序の構築に向けての課題と、特に日本・中国・韓国を含むアジアにおける経済連携の重要性についての分析を行う。
総合	13	富田与	戦争のメタファー	これまでの麻薬戦争の研究を改変し、政策の名称に戦争がメタファーとして使われることの意味を考える。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	14	富田与	「バンクシー現象」の意味するもの	バンクシー研究の継続で、そこでの「例外」の意味を考える。
総合	15	富田与	国際システムの変化	安全保障と自由貿易を中心に、2022年以降の変化の記述方法を考える。
総合	16	永井 博	竹山道雄『ビルマの豎琴』論	戦後発表された竹山道雄『ビルマの豎琴』は敗戦後イギリス軍の捕虜になった日本軍兵士たちの物語（児童文学作品）である。これが戦前、戦中の皇国思想と密接に結びついていた無捕虜主義を隠蔽、抹消しようとする意図を明らかにする。
総合	17	中西 紀夫	日本のEVシフトの現状と今後の動向について	世界はパリ協定を契機として、脱炭素社会の実現を旗印に自動車に対して、ガソリン車やディーゼル車から電気モーターを動力源で走行するEVへの転換を目指す動きが活発化している状況にある。ただし、EVには問題点も多いため、現時点ではHVやPHEVのほうが多くのユーザーに望まれているという傾向にはある。この研究では、日本のEVシフトの現状を欧米や中国と比較しながら、今後の動向について分析することにする。
総合	18	Felipe Ferrari	戸坂潤における京都学派の批判	1934年に、『現代哲学講義』においては、戸坂潤は以下のとおり西田幾多郎の哲学を批判した。 「西田哲学が、一口で云えば、我が国に於ける、或いは又世界に於ける、最も雄大なブルジョア観念哲学だからなのである。尤も西田哲学がブルジョア哲学であるということは、恐らく誰でも想像し誰でも知っている事実である。問題はこの哲学がどんな諸特色を示すことによって、ブルジョア哲学として自己確立しつつあるかである。」 戸坂は、学者にはファシズムや軍国主義を反対する責任があるが、西田哲学、および京都学派の思想が、「意識」の問題に集中しすぎ、当時の日本の政治や社会問題を無視していたと批判をしていた。 2025年は太平洋戦争終戦80周年であり、西田幾多郎、三木清と戸坂潤、の没後80年にあたるので、現在の研究の目的は戸坂がマルクス主義哲学者として、どのように京都学派を批判していたかを明らかにすることである。
総合	19	二村 建也	個人（家計）の金融リテラシーと金融資産の分散に関する意思決定に関する研究	2017年に個人型確定拠出年金（iDeCo）の加入者範囲が広がり、原則として現役世代はすべて加入できるようになった。また2024年には少額投資非課税制度（NISA）が新しくなり、年間投資枠の拡大や非課税保有期間の無期限化、制度の恒久化が図られた。いずれも、人生100年時代と言われるように現役引退後の長い老後に備えるための資産形成に有効な制度である。これらの制度をより効果的に活用する運用手法のひとつが分散投資であり、運用成果にも大きく影響する。この研究では、個人（家計）の金融リテラシーが、金融資産、具体的には預貯金、株式、投資信託、外貨預金、日本の国債などの分散保有と関係しているのか、関係しているのならどう関係しているのかについて実証分析を行う。実証分析には「くらしの好みと満足度についてのアンケート」などの個票データを用いる。
総合	20	二村 建也	会計や経営に関する経営者の学習	経営者が事業を経営していくうえで、会計や経営に関する知識（リテラシー）が必要とされることは少なくない。しかし、必要とされる知識が幅広いこともあり、これまで会計や経営に関する知識を測定する標準的な手法や設問を使った知識を効果的に学習できる教育内容および方法を検討する。そうした知識の測定が実現できれば、将来的には経営者や起業家を対象にした教育内容・方法の改善や向上に貢献できるかもしれない。設問を開発する研究には、中小企業診断士およびファイナンシャルプランナーとして長く活動してきた自身の経験をいかしたい。
総合	21	松本 彩月	離島・沖縄における多胎育児家庭の現状と支援ニーズに関する研究	沖縄県および離島における多胎育児家庭が抱える困難と現状を明らかにし、その支援ニーズを把握することを目的とする。多胎育児は、単胎育児に比べて身体的、精神的、経済的な負担が大きい、その中でも離島においての多胎育児の実態はまだ明らかにされていない。特に離島という特殊な環境下では、支援体制の不足や地域的な制約から、より深刻な状況に陥る可能性がある。これまで久米島で行ってきた調査研究では離島独特の課題として移動費や子育て支援制度の遅れ、施設不足が明らかになっている。さらに沖縄全体では戦後の児童福祉法適用除外期間の影響が残る中、多様な社会課題を抱えた上で、多胎育児を行う家庭が多く存在している。過酷な状況下での多胎育児を明らかにすることで、広義の子育て支援の在り方についての展望を見出したい。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	22	三田 泰雅	実践する総合政策	地方都市の人口減少について現状の把握と要因分析を行う。三重県名張市を対象地として、名張市および名張商工会議所と連携して研究を進める。今年度は名張商工会議所との共同研究として、市民を対象に質問紙調査を実施する予定である。
総合	23	三田 泰雅	人々の社会参加はどう変わったか	首都圏30自治体の住民を対象に質問紙調査を行い、2010年に実施した同規模調査との比較を行う。女性の社会進出や、未婚化・少子化の進行が、人々の社会参加にどのような影響を与えたのかを明らかにする。
総合	24	吉川 和挟	政策の受容可能性の成立要件に関する事例研究	政策の受容可能性（acceptability）については、政策の成功を考える際の重要な要素でありながら、本邦においてはあまり研究が進んでいない。本研究においては政策の受容可能性に関する既存の理論研究を踏まえつつ、その具体的な応用手法を検討するために、自治体における条例制定過程などの事例研究を行う。具体的には受容改善のための分析枠組みとして既往研究より①市民参加、②執行スタイル、③情報提供の三つの要素に着目しつつ、埼玉県虐待禁止条例や香川県ネット・ゲーム依存症対策条例などのいわゆる「炎上」した条例の制定過程などについて議事録や各種報道資料などの事例比較研究を行う。本検討を通して、受容可能な政策デザインを行う際の具体的な考慮事項などに関する含意を引き出す。
総合	25	吉川 和挟	政策助言システムに関する研究	政府は政策的意思決定を行う際に複数の機関からの諮問や情報提供を受ける。このような複数の組織による政策助言をより体系的に捉える理論的概念を政策助言システム（以下、PAS：Policy Advisory Systems）と呼ぶ。伝統的には政府内の諮問会・審議会などが政府の政策形成・決定過程に及ぼす影響度、及び政府がこれらの諮問組織に対して有する統制権限（予算や人事、テーマ選定など）等への検討から始まり、現代的には政府組織外の諮問組織ネットワークの存在を前提として、それらの政策助言の内容や、政策過程への影響度の分析が行われている。本研究ではこれらの政策助言システムの議論状況をレビューするとともに、近時注目されているEBMP（及びそのガバナンス）の議論などとの結合を図りつつ、どのような政策助言機関が、政策過程のどの過程・側面により強く影響力を行使しようとしているかについての分析を行う。これらの検討を通して、例えば研究機関としての大学が行う地方自治体への研究協力・政策助言の全体像・役割分担・統制の在り方などを明らかにする。
総合	26	Gordon Rees	Exploring the Impact of Student-Produced Filmmaking on Motivation in the EFL Classroom	This research project explores the use of filmmaking as a performance-assisted learning (PAL) activity in an EFL classroom, with a particular focus on how the filmmaking process affects student motivation. Students will write scripts in English, act in, and film their own short movies using smartphones. In addition to learning expressive English for performance, they will be introduced to basic filming and editing techniques to support their creative work. The course will begin with foundational PAL activities—such as radio drama, reader’s theater, and skits—to build confidence and fluency. The final five weeks will be devoted to collaborative scriptwriting and film production. By observing and reflecting on this student-centered project, the research aims to investigate whether and how engaging in creative storytelling and production increases learners’ motivation and interest in using English.

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
総合	27	若山 裕晃	アメリカMLB球団におけるメンタルトレーニング指導の実態調査	アスリートの競技力向上を目的としてスポーツ心理学者が競技現場でメンタルトレーニングを指導することが日本のスポーツ界でも浸透し始めている。本年度の研究では、日本で最もポピュラーなスポーツの一つである野球競技におけるスポーツ心理学者の活動状況について、これまでの経緯に踏まえさらに調査を進める考えである。 2016年9月、筆者は、あるメジャーリーグ球団のアリゾナ秋季教育リーグを視察した。そこでは、シーズンを終えたばかりのマイナーリーグの選手やコーチたちが、大小8面ほどのグラウンドやバッティングケージで黙々と練習に励み、日々の練習メニューの中に、技術やフィジカルトレーニングと同様にメンタルトレーニングのセッションが設けられていた。それ以来、マイナーチームのメンタルトレーニングの指導を担当する専属の2名スポーツ心理学者と交流を続け、2018年3月には、スプリングトレーニング時のマイナー選手への講義とエクササイズ形式でのメンタルトレーニング指導を視察し、筆者自身もそのプログラムを体験した。同年12月には、チームビルディングプログラムの手法についてレクチャーを受けた。この球団は、2015年からメジャーとマイナーにメンタルトレーニング指導者を雇用しており、マイナーチーム担当の彼らは、シーズン中傘下のマイナー6チームを巡回して活動している。2023年3月には、5年ぶりにスプリングトレーニングを視察し、彼ら以外にも他球団のスポーツ心理学者たちから情報収集することができた。この訪問によってアメリカでも球団によってスポーツ心理学者の雇用形態やチームでの地位が様々であることが明らかになった。このようなアメリカ野球界におけるメンタルトレーニングに関する情報は、日本の野球界においてほとんど知られていない。本年度の研究では、これまでに交流を持てたスポーツ心理学者たちからの情報収集を目的にリモートインタビューを定期的の実施し、選手・スタッフに対するメンタルトレーニングの指導内容について聞き取り調査を実施する。 (参考文献) 若山裕晃 (2017) 日米野球界におけるメンタルトレーニング事情に関する予備的調査. 四日市大学総合政策学部論集、第16巻 第2号、57-62. 若山裕晃・渡辺英児(2017). 野球メンタル強化メソッド. 実業之日本社.
環境	28	青木 陽子	日本に住む外国人と日本社会	1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正以降、四日市市をはじめ東海地域には、「ニューカマー」と呼ばれる南米日系人をはじめとする外国人住民が多数居住することになり、さらに、近年では、「特定技能」の在留資格も新設され、家族の帯同も可能な在留資格のもと、日本は本格的に外国人を「労働者」として受け入れる段階に入ってきている。このように出入国管理制度の改正により、日本で働く外国人の国籍構成や在留実態はますます多様化している中で、国籍制度をはじめとする日本の諸制度がどのような影響を与えているのか、行政の視点、外国人住民の視点、外国人支援組織の視点などから、多角的に問題をとらえ分析を行う。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	29	足立 明信	圧電素子收音の音質を空気媒介マイク收音に近づけるデジタル信号処理技術の開発	弱音楽器の拡声において、圧電素子を用いた收音は一般的に採用される手法である。圧電素子による收音は、收音と拡声が同一空間で行われる場合にフィードバックの発生を抑制するという大きな利点を持つ。しかし、この手法は音質面での課題があり、一般的な空気媒介マイク收音と比較して音色が不自然になることが多い。 この問題により、現場では音質を犠牲にしてもフィードバックを抑制できる收音方法を選択せざるを得ない状況が頻繁に発生している。本研究ではこの課題を解決するため、圧電素子で收音した音声をデジタル信号処理技術(インパルスレスポンスによる畳み込み)を活用して自然な音質に変換する手法の開発を目指す。 一般的なインパルスレスポンス(IR)の測定は、理想的なインパルス信号をシステムに入力し、その応答を観測することで行われる。 しかし、本研究で対象とする圧電素子收音と空気媒介マイク收音の音声信号は、楽器演奏という不規則な入力信号に基づくため、従来の手法では直接IRを導き出すことが困難である。 本研究では、同時に収録された圧電素子收音と空気媒介マイク收音の音声信号から周波数領域での伝達関数を算出し、逆フーリエ変換によりIRを生成する手法を提案・検証する。この手法が有効であれば、生成したIRを畳み込み演算により適用することで、圧電素子收音の音声を空気媒介マイク收音の音質に変換することが可能となる。 さらに、リアルタイム処理を実現するため、処理遅延を抑えるための技術的工夫も行う。具体的には、既存のIRローダー技術を応用し、効率的なシステム設計を目指す。 検証対象としては、まずアコースティックギターとピアノを想定し、異なる特性を持つ楽器での有効性を確認することで、汎用的な技術基盤の構築を目指す。 本研究はR6年度からの継続研究で、現在進捗は70%程度です。運用に乗るかを検証中での段階で、既に複数のアーティストのコンサートで試運用中。
環境	30	足立 明信	スポーツ施設における、複合イベントに伴う音響問題に関する研究	スポーツ施設での複合イベントは広く行われているが、近隣住民、企業および周辺施設への騒音問題が課題となっている。本研究では、施設の音の伝播特性を精密に計測し、効果的な対策案の策定を目指すものである。 対策検討は、施設の物理的改修などのハード面だけでなく、複合イベント音量規制、開催時間帯の適正化、地域条例との整合性確保といった運用面のソフト対策も包括的に含むものである。 現段階では施設の音の伝播特性の計測と解析・モデル化を完了し、シミュレーションを実施した。この成果に基づき、ハード面における問題点を特定し、具体的な改修方法の提案およびその実現可能性の検討を進めているところである。
環境	31	足立 明信	マルチスピーカーを活用した空間音響アートの実践	本研究では、マルチスピーカーシステムによる立体音響技術を用いたテクノロジーアート作品の創出に取り組んでいる。三次元空間全体を音響キャンバスとして活用し、鑑賞者に没入型の聴覚体験を提供することを目指すものである。 この研究は音響芸術単体での表現だけでなく、ビジュアルアートや空間演出、コンテンポラリーダンスなどの身体芸術とのコラボレーションも視野に入れている。また、人間の聴覚メカニズムを応用した音響錯覚の研究と実装も重要な要素となっている。 2025年4月には、即興性の高い前衛的なコンテンポラリーダンスと立体音響システムを組み合わせたコラボレーションプロジェクトを実施し、ダンサーの動きと音の空間的移動が呼応する新たな表現形態を創出した。 今後は、より高度な空間音響制御技術の開発や多感覚芸術作品の創出、特定空間の音響特性を活かした作品制作に挑戦し、テクノロジーと芸術表現の融合による新たな表現領域の開拓を目指すものである。
環境	32	池田 幹男	音響インパルス応答の計測のための信号の設計に関する研究	現在、オールパスフィルタのインパルス応答を用いた音響インパルス応答の計測に関する研究を行っている。今年度は、計測系の量子化の影響を考慮して、量子化を組み込んだ系列の設計法について研究する。また、従来から音響インパルス応答の計測に使用されている青島のTSP信号の部分列をもとにオールパスフィルタを用いてTSP信号の部分列を外挿する方法についても研究する。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	33	大八木 麻希	日光川河口付近におけるヒレイケ チョウガイの生息環境特性	ヒレイケチョウガイは淡水真珠養殖の母貝となる二枚貝であり、愛知県内での報告はされてこなかった。しかし、2024年8月に日光川河口付近で成貝の死骸と複数の生息稚貝が発見された。ヒレイケチョウガイは中国産の二枚貝であり、昭和50年以降に真珠養殖を目的として日本に持ち込まれたが、どのような経緯で日光川に定着したのかは不明である。そこで、本研究では、ヒレイケチョウガイの繁殖に適した生息環境について水質と土質の特性を明らかにすることを目的とした。
環境	34	大八木 麻希	北勢中央公園内の池及びマンボの水 質特性	農業用井戸であるマンボは、集水域の地下水の水質に影響を受けるとともに、配水域の農業用水の品質にも影響を与える。また、洞穴性コウモリ類が生息するマンボでは、コウモリの排泄物が一面に堆積している場所もあり、生物による影響も無視できない。マンボおよび周辺水路において調査を行うことで、地下水および農業用水の水質変化を把握し、農地からの過剰な肥料流出を防止し、陸域の環境負荷低減につなげることができる。マンボおよび周辺農業用水の調査では、地下水位および流量等に加えて、主要な肥料成分である窒素を中心に、リンおよび炭素について調査し、富栄養化に対する寄与評価を行う。あわせて、周辺水域の農地を調査し、土地利用の状況と地下水の水質の関係について調べる。これらの調査を通じて、環境負荷を低減した水質環境保全型農業モデルの提言を目指す。
環境	35	片山 清和	AIを用いた太陽光発電量予測の高精 度化	近年ChatGPTで話題になっているTransformerを用いて太陽光発電量を高精度に予測する手法を開発する。
環境	36	片山 清和	AIを用いたセンサーカメラ画像のス クリーニング	野生生物調査においてセンサーカメラがよく使われている。このカメラは赤外線を利用して前面を熱を持つ物体が動くとき撮影するものであるが、誤撮影が発生する。そこで、センサーカメラで撮影した画像からAIを用いて誤撮影された画像を除去する手法を開発する。
環境	37	鬼頭 浩文	災害支援体制の持続と、地域防災に 中高大生が貢献する仕組みの地域社 会への実装	・四日市市と連携して、学生が支援物資ロジスティクスに貢献する仕組みを構築する ・四日市市消防本部と連携して構築した避難所運営に学生が貢献する仕組みをブラッシュアップ ・社協と連携して設置した学生が災害ボランティアセンター運営に貢献する仕組みをブラッシュアップ ・能登半島地震の被災地における災害支援や被災者の生活、復興への取り組みに関する調査・研究 以上の研究を通して、県市町の地域防災計画、四日市市内各地域の地区防災計画、四日市大学事業継続計画に成果を反映させ、実効性を確保するための訓練を実現していきたい。
環境	38	木藤 裕也	画像解析AIを用いた水産資源生物の 生態調査技術開発	近年、AI技術、特に画像解析を中心とする視覚情報処理の分野は著しい発展を遂げており、複雑な対象物の認識や分類、挙動の解析などにおいて高い精度が達成されつつある。こうした技術は、生態調査においても新たな展開をもたらす可能性を秘めており、従来の手法では困難であった個体の識別や行動の追跡などの高度な解析を支援し得る。一方、四方が海に囲まれる日本において、漁業は文化的・経済的に重要な役割を果たしており、沿岸域を中心に多様な水産資源が利用されてきた。中でも、浅海域に生息する水産無脊椎動物は重要な磯根資源として知られ、その持続的な利用には生態に関する基礎的理解が不可欠である。しかし、これらの海洋生物は水中に生息しているため観察が困難であり、生態調査には多くの技術的・環境的制約が存在する。その結果として、資源の持続的利用に不可欠な生態学的知見が、依然として多くの種で不足しているのが現状である。本研究課題では、特に日本の浅海域に生息する磯根資源、すなわち水産無脊椎動物に焦点を当て、これらの種に対する効率的かつ高精度な生態調査技術の開発を目的とする。その一環として、先述のAI画像解析技術を応用し、生態調査に必要とされる個体識別および行動追跡を可能とする手法の構築を目指す。
環境	39	黒田 淳哉	先端デジタル技術を用いた地域教育 資源のデジタルアーカイブ構築	本研究は、アナログメディアに記録された地域の貴重な映像資料を、先端的なデジタル技術を用いてリマスタリングし、デジタルアーカイブ化することを目的とする。近年、再生機器の製造終了や老朽化、メディア自体の物理的劣化により、過去の記録の再生が困難となり、文化的・教育的資産の喪失が深刻な課題となっている。こうした状況を踏まえ、本研究ではアナログ資料を高品質なデジタル資産として再構築し、教育・研究・地域社会に資する形で活用を図るとともに、デジタルアーカイブの新たな保存・活用モデルの構築を目指す。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	40	野呂 達哉	音声と環境DNAによるコウモリ類の検出とモニタリングに関する研究	コウモリ類は生態系や人の生活と深い関わりのある動物である。食虫性の種については、害虫の防除に、また、植物食の種については、植物の受粉や種子分散にも役立っている。一方で、コウモリ類は人畜共通感染症（SARSやMARS等）の宿主ともなっていることから、今後も注視が必要であり、継続的なモニタリングが望まれる動物でもある。しかし、夜行性の飛翔動物であるため、直接的に生息状況を把握することは難しい。そこで、本研究では、コウモリ類の発する音声と環境DNAに着目し、コウモリ類のモニタリング調査を実施する。これらを使った手法は、捕獲を伴わない非侵襲的手法であるため、コウモリ類への負担がほとんどない。また、調査者がねぐらに侵入する必要がないため、ねぐらの放棄といった悪影響が生じない。洞穴性のコウモリ類は、ねぐらの減少によって地域的な希少種となっているが、一方で洞窟に類似した人工的環境に適応している。その中で、農業用水として利用されているマンボや暗渠のトンネルが洞穴性コウモリ類のねぐらや繁殖場所となっている。本研究では、これらの調査地で継続的に音声および環境DNAによる調査を実施し、コウモリ類の種構成や密度、季節的变化を明らかにする。このことによって、本来は農業用の人工構造物であるマンボや暗渠が、減少している洞穴性コウモリ類の貴重なねぐらとして利用され、また、農業用水路がコウモリ類の餌場や移動経路となっていることを明らかにする。
環境	41	野呂 達哉	名古屋市におけるアカギツネの都市化に関する研究	都市域である名古屋市では、高度成長期以降、生息場所の減少などで激減したアカギツネが、最近になって、増加傾向に転じ、分布を拡大している。2000年代前半には、山地と繋がる市北東部での記録が大半を占めていたが、2010年代になると、都市域との境界地域である郊外での確認事例が増加し、最近になって都市域でも確認されるようになった。2000年代初頭よりセンサーカメラや目撃事例、交通事故死体の記録が蓄積されており、これらの位置データと確認地点の土地利用状況を基にGISを使用した環境解析を行い、アカギツネの都市化の変遷とその原因について明らかにする。
環境	42	樋口 晶子	初級英語学習者を対象としたコミュニケーション能力に関する複数の力に関連している。外国語で書く場合、当該外国語を読む力と母語の書く技能に大きく依存し、母語で書く技能に最も強い影響を与えるのは思考であると言われる。英語で書く練習は学習者の思考力を高めることが可能であるが、初級者にとって英語でパラグラフを書くことは容易ではない。ライティングに関する研究も中～上級レベルの学習者を対象にしたものが多く、初級レベルの学習者を対象とした研究は多くない。 2022年から継続しているQ&A形式を利用した制限作文による誘導的パラグラフ・ライティング指導の効果を検証する。授業前後のアンケート及び学習者の書いたパラグラフを比較し、学習者の意識の変化とライティング力の変化について検証する。指導はコミュニケーション能力・アプローチに基づき、読み手を意識して内容に重点を置く。	
環境	43	樋口 晶子	マンスフィールドの「幸福」から見る結婚制度への懐疑的姿勢と安定への希求	キャサリン・マンスフィールドは、イギリス小説においてほとんど比を見ないほどに自己の体験をその作品に織り込んだ作家であると言われている。その名を世に知らしめた最初の作品の一つである短編「幸福（原題：Bliss）」（1920(初出1918)）は、主人公パーサ・ヤングが結婚して夫と子供を持ち、経済的にも友人にも恵まれ、自らも至福の思いを迸らせながら、一方で、他の女性に魅かれたり、その女性と夫との裏切りを目の当たりにする物語である。それは作家自身が持つバイセクシュアルの傾向や、パートナーMurryとの人間関係、前夫との離婚成立、そして自身の健康上の不安といった執筆当時の作家の状況における心情を映し出した作品であると言える。自分の本来の気質と、当時の女性の社会的立場との狭間で思い迷ったマンスフィールドが、主人公パーサを通じてどんなメッセージを込めたのか、その解釈を試みることで、現代にも通じる女性の幸福について考察する。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	44	廣住 豊一	竹林間伐材由来の資材を連用した農耕地における土壌物理化学性の経年変化（継続）	四日市地域は豊富な竹林資源に恵まれている。しかしその一方で管理を放棄された竹林が問題になっている。そこで放棄竹林対策の一環として、竹林間伐材を肥料化し、有用な資源として活用することを目指す取り組みが行われている。 本研究課題では竹粉の利用促進をはかるため、農地に対する竹粉施与による「土づくり」効果について現地調査によって調べる。本年度も引き続き、三重県四日市市堂ヶ山町にある竹粉施与試験田において、田植え前(4月)および稲刈り後(9月)に土壌調査を実施する。そして、竹林間伐材から製造された粉末肥料を連用することによる農耕地土壌の物理化学性の経年的な変化について調べる。
環境	45	廣住 豊一	小型試験田を用いた緩効性肥料被覆樹脂の流出量調査（継続）	水田に散布された緩効性肥料の被覆樹脂の流出が問題となっている。しかし、その実態は明らかになっていない。本研究課題では実験ほ場に小型の試験田を造成し、ここで緩効性肥料を用いた水稻作を行うことで、水田からの被覆樹脂の流出状況について、実験的に調べている。本年度は、昨年度に引き続き小型試験田において水稻作を継続し、被覆樹脂流出の経年的な変化を調べる。
環境	46	廣住 豊一	地温冷却がトルコギキョウの生育と切り花品質に与える影響（継続）	トルコギキョウは花色・花形が豊富で、フラワーアレンジメントやブライダルなど幅広いジャンルで使用され、生花店でも大部分の店舗で取り扱いが見られるわが国の主要な花きである。トルコギキョウは、キク、バラ、ユリ、カーネーションなどと並んで花き市場において重要な地位を占める。 トルコギキョウは、温度によって生育や切り花品質が影響を受けることが知られている。なかでも、高温による色流れは品質や出荷価格を大きく低下させるため、この対策は極めて重要である。本年度は、試作した根域冷却装置をさらに改良し、地温を局所冷却することによる切り花品質の改善効果について調べる。
環境	47	廣住 豊一	高塩分濃度の温泉水を用いた高糖度イチゴ栽培	平成29年度に実施したC0C1人1プロジェクト「北勢地域の温泉資源を活用した地域ブランド農作物創出への挑戦」によって高塩分濃度の温泉水を灌漑することによって、トマトの果実糖度を高めることができることが明らかになった。そこで本年度はこの技術をイチゴ栽培に応用できないか検証する。
環境	48	古山 歩	伊勢・三河湾に生息するスナメリの生態調査	三重県には、小型の鯨類スナメリ <i>Neophocaena asiaeorientalis</i> が生息しており、伊勢・三河湾において独立した地域個体群を形成している。スナメリは沿岸性が強く、堤防や漁港などからも目視で観察できるほど人間の生活圏に近いところに生息していることから様々な人間活動の影響を受けやすいことが懸念されており、IUCNのレッドリストにおいては絶滅危惧種・危急に指定されている。スナメリと人間の共存を図り、スナメリ個体群を適切に保全するためには、彼らの生態情報が必要不可欠である。そこで、本研究では、様々な手法を用いて伊勢・三河湾に生息するスナメリを調査し、生態情報をはじめとした彼らの保全に必要な情報を収集する。 伊勢・三河湾の海岸では、毎年スナメリの死亡漂着が報告されている。三重県において死亡漂着するスナメリを調査し、その頭数や体長傾向を記録、死亡漂着の季節変動や年変動を調べる。また、死亡漂着個体からは研究のための試料を採取し、胃内容物分析や筋肉の安定同位体比分析による食性解析、腸管のマイクロプラスチック分析によるマイクロプラスチック汚染調査等を実施する。 また、海岸からドローンを飛ばし、沿岸域に來遊するスナメリを観察する。ドローン映像から、沿岸域でのスナメリの行動を解析し、海域利用性について考察するほか、季節的な來遊個体数の増減などを調査する。 死亡漂着個体から得た試料の分析とドローンによる生体観察から、伊勢・三河湾に生息するスナメリを多角的に調査し、本種の生態や環境汚染の影響を明らかにする。

学部	連番	氏名	研究テーマ	概要
環境	49	前川 督雄	情報環境構造の解析法ならびに生成法の開発研究	環境から感覚系で受容する環境の情動的側面（以下、情報環境と呼ぶ）のもつ情報構造を解析し、評価する手法を開発する。 情報構造のうち、その時間的空間的密度、複雑性、変容性に注目し、フラクタル次元局所指数を指標とした解析手法の開発を進めている。これまでハイパーソニック・エフェクトを導くハイパーソニック・サウンドのもつ自己相関秩序を見出した。また、テクスチャーの視覚情報構造について、縄文土器テクスチャーと弥生土器テクスチャーとの間に、フラクタル次元局指数の値や推移における違いを見出すことができた。さらに、フラクタル構造細密化手法FINEを開発して、2次元視覚情報構造の生成を試みてきた。 今年度は、広視野にひろがる情報構造への展開の試行を継続する。
環境	50	前川 督雄	プログラムされた自己解体をとともなう進化シミュレーション	有限不均質な環境条件をもつ人工生態系シミュレーター-SIVAを用いて、プログラムされた自己解体のメカニズムを有する地球生命の進化・多様化と地球生態系の成熟とをシミュレーションする。
環境	51	牧田 直子	水田に生息する微小珪藻類の分類	水田に生息する珪藻類は微小なものが多く、種名まで詳細に記載された報告例は多くない。本研究では、水田で高頻度に出現する微小珪藻類の種類を明らかにする。珪藻類の大きさは多種多様であり、小さい珪藻類ほど分類が難しくなる。よって、昨年度から継続して今年度も研究を行うことを計画している。
環境	52	牧田 直子	プランクトンの簡易観察法の開発と教材化	小中学校の理科の授業でプランクトンについて習うため、プランクトンに関心のある子供たちは少なくない。しかしながら、プランクトンはとても小さな生き物であるため、ある程度の知識や道具がないと、採集や観察がやや難しいため、授業で芽生えた好奇心からより深い学びへとは進みにくい。本研究では、手軽に入手できる素材や機器を活用して、子供でも容易にプランクトン採集や観察ができる方法を提案することを目的として、実験器具やそれらを用いた観察手法の開発を行う。そして、小中学校の授業でも使えるものとして、教材化を試みる。
環境	53	柳澤 翔士	視聴覚VRシステムにおけるサラウンド方式の検討	視聴覚VRシステムにを用いた没入型コンテンツの演出において、適したサラウンドの方式と音を提示するためのシステムの調査・研究・開発を行う。
環境	54	柳澤 翔士	ImpulseResponseによる残響再現用IRデータ計測および機器構成の検討	様々な環境における響きの再現を行う際にImpulseResponseという、その環境における反射応答を計測することで、その環境のリアルな響きを再現することが可能である。ただしこの計測時における計測機器構成がデータに与える影響は無視できるものではない。本研究では、様々な機器構成でのIRデータ計測を行うことで、IRデータに機器構成が与える影響を調査する。
環境	55	柳瀬 元志	Z世代を対象とした過去のテレビ番組を用いての視聴研究	若者の「テレビ離れ」が叫ばれて久しい。総務省の調査によると、13歳から19歳の視聴時間は2000年から2015年の15年間でおよそ3分の1近くまでに減少している。最も大きな要因は、インターネットの普及である事は間違いないが、テレビ番組の”質“自体はどうだろう。横浜にある公益財団法人 放送ライブラリーは、放送法に基づく日本唯一の放送番組専用アーカイブ施設で、過去のテレビ・ラジオ・CMなどおよそ3万本を無料公開しており、さらにこの貴重な資料を、教材・視聴覚資料としてオンラインで活用することができる。このシステムを利用し、テレビが元気だった時代に作られた作品を、Z世代と言われるテレビ離れが著しい年代の学生に見せたら、どんな反応を示すのか。また彼らをテレビ視聴に引き戻すヒントになることがあるのではないか。娯楽の主役がテレビからインターネットに移った今、過去の秀作と現在をつないでテレビのこれからを探る。昨年と同様のテーマではあるが、引き続き研究を進めていきたい。